

- 東日本大震災から 3 年が経過。
福島、日本の復興を担っていくのは君たち。
- 1、2 年生諸君、本日は、教務・生徒指導・進路からの話もないので、担任の先生からの話と重複するかも知れないが、少し細かい話～勉強・学習面での話をしたい。

学年末の考査を終えて、反省材料がそろい、君たちはこの一年を振り返ってみたと思う。順調に伸びた人、努力したと思うほど伸びなかった人、成績が下がった人・・・様々だろう。君たちは高校の真っ只中にいるので、「高校時代の勉強」の意味についてあまり考えたことはないのかも知れない。或いは、行きたい大学に入るまでの通過点に過ぎないと捉えている人もいるかも知れない。

- 私は高校を卒業して 3 9 年になる。その後、(教諭として 1 8 年、教頭・校長として 5 年、教育行政の仕事で 1 1 年、) 教育に関わる仕事を 3 4 年間続けてきた中で、様々なことを学んできた。中でも、高校時代の勉強が如何に重要かということを痛感してきた。例えば、高校の教師になった人で、高校時代にももの凄く勉強した人、半端でない努力をした人、このような人は優れた教師になっていることが多い。もちろん、優れた教師の中には、高校時代あまり勉強しなかったけれど、大学で大変な努力をした人もいる。(高校時代のしっかりした勉強は、優れた教師になるための十分条件と言える。)
このことは、新聞の編集に関わっているマスコミ関係者からも、県庁や市役所など行政で仕事をしている人からも聞いたことがある。つまり、同じ大学出身者を比べると、高校時代の勉強の質と量が優っている方が、いい仕事をする、というのである。

- 教師の場合は、自分がどのように学んだか、どのような授業を受けたか、といった自分自身の生の経験を直接活かすことができるということはあるが、教師以外の仕事でも、同様のことが言えるのはなぜなのか。
様々な理由が考えられるが、高校の勉強に本気で取り組めば、様々なジャンルの文章に接して、多様な考え方・感じ方に触れることができ思考力が鍛えられること、国語だけでなく質の高い言語活動が展開されること、数学で培われる確実な論拠に基づいて考察し判断する力が養われること、正解にたどり着くまであきらめず粘り強く取り組む姿勢、先生に言われてやるのではなく、自ら進んで難問に挑戦する姿勢が身につくこと、大学での自ら選んだ研究テーマを深く掘り下げる方法ではなく、好むと好まざるに関わらず謂わば修行のように勉強で自らを鍛えることができる、等々、答えは一つではないだろう。

- ただ、間違いなく言えることは、安積での 3 年間の勉強が、君たちの今後の長い人生を支えていくことは確かだということ。
(更に言うならば、安積の精神・スピリットを意識して仲間と共に安積の時間を過ごしていく内に、他の高校では見られない安積独特の発酵現象が起こり、自分にも先生にもよくわからない不思議なもの、大げさに言えば生涯効き目が続く安積ブランドの酵素のようなものが安高生の中に醸し出されるのではないかと私は考えている。)

- 勉強は苦しいけれど楽しい、次第にわかっていくのは楽しいがやっぱりつらい。そのことは中学3年間と安積での1～2年間の勉強をとおして、君たちも経験しているはず。

私も大学に入ってから、入試の文系の数学は大問4問中2問できれば何とかなると言われていたが、2問目の途中で頭が真っ白になり、そこから先へ進めないでもがき続ける夢にうなされた経験があるし、教員になってからも何年かはそのような夢を見た記憶がある。それくらい苦しさも伴っているということだと思う。

- 君たちはその努力をしているだろうか。努力をしていない、或いは努力が足りない生徒が例年より多いのではないかという声を聞きます。

「僕は、私は、やればできるんだ。今はまだやっていないだけ」という考え方は非常に危険。高校時代の時間の密度は、長い人生の中でも最も濃いはず。

「129期学年便り」～安高生に遊んでいる時間はない～

密度が薄い、低いと思った生徒諸君は、今日から、今から、始めよう。

何度も話しているが、目標が少しでも早く固まり、それに向かって一日でも早くスタートできれば、必ず目標に到達できる。

- 最後に、私が弱気になった時に口ずさむ短歌を紹介して終わります。

与謝野晶子

劫初（ごうしょ）よりつくり営む殿堂に われも黄金の釘一つ打つ

遠い遠いこの世界の初めから人間は（文化遺産ともいうべき文芸の無形の）殿堂を営々として築き上げてきたが、自分も釘一本なりと打ち込み、ささやかではあるがその営みに参画したい。それも、ありきたりの鉄の釘ではなく光り輝く黄金の釘を。

気宇壮大な与謝野女史の足元にも及ばなくとも、自分が進もうとしている分野でせめて小さな鉄釘を打てるように努力しよう、と思うようにしている・・

<参考>

- 学校そのものを歌った詩歌は、意外なことにさほど多くないが、読むたびに勇気を奮い起こしてくれる女性詩人、
茨木のり子さんの「学校 あの不思議な場所」という詩の一節を紹介

学校 あの不思議な場所
校門をくぐりながら蛇蝎のごとく嫌った ところ
飛びたつと
森のようになつかしいところ
今日もあまたの小さな森で
水仙のような友情が生れ匂ったりしているだろう
新しい葡萄酒のように
なにかがごちゃまぜに醗酵したりしているだろう
飛びたつ者たち
自由の小鳥になれ
自由の猛禽になれ

最後の、自由の猛禽になれというところが茨木さんらしい表現だが、学校が仲間たちとの出会いと友情を育み、「なにかがごちゃまぜに醗酵したりして」、時間の経過とともに何かが生まれてくる場所、という学校の不思議さをよく捉えている詩だと思う。